

雅釋文云、的或作葯同、源君所見蓋陸氏所謂或本也、那波本作的、係依今本校改、那波本無音漁釣之釣、又音的八字、那波氏改葯作的、故刪去是注也、廣本蓮中子上有謂字、恐非、

〔幽遠隨筆〕下蓮をはちすといふこと、ゆへなきにあらす、はすの實のぬけ出たるあと、蜂といふ虫の窠によく似たるゆへはちすといふ也、後頼口傳

〔倭訓栞中編十九〕はちす 蓮をいふ、荷も同じ、蜂窠の義也、西土の書にも葯在房如蜂子在窠と見えたり、古事記の歌にはなばちすとも見ゆ、花と實と一時に相具するもの也、歌にうき葉、たちは、なびき葉などよめり、まきはといふは捲荷也、蓮葉宴は光仁紀にみゆ、十二時蓮は天竺蓮也、群芳譜にいふ千葉蓮なるべし、近江の國田中の里佐々木の末葉今に是を所持せり、一莖數花にて其葩ちらす、莖に糸なし、此十二時蓮は梁武帝の佛式に出たり、又天竺蓮と稱する別種あり、太平清話に清水池在儋州城東、其中四季荷花不絶、臘月花盛と見ゆ、東國にむくげをはちすといふ、齊東昏侯好奢侈、以黃金鑿成蓮花列之於地、令妃潘玉奴行其上、曰、歩々生蓮花、

〔古今要覽稿草木〕はちす はす 蓮

はちすは古名にして、はすは通稱なり、古事記をはじめ、日本書紀、續日本紀、三代實錄、延喜式、萬葉集、菅家文草の詩にも見え、本草和名、和本本草、共に藕實をはちすのみといひ、和名類聚抄類に、蓮子はちすのみと出し、亦蓮類を出して芙蕖、爾雅にいふ荷は芙蕖、郭璞注云、芙蓉江東呼て荷となす、藕ははちすのね、その本は薯ははちすのはひ注にいふ、莖下の白藕泥中にあるものなり、茄ははすのくき、其葉は蓮注にいふ、蓮また荷の字なり、其華は菡萏、兼名苑にいふ蓮花、すでに開くを芙蕖といふ、またのびざるを菡萏といふ、其子は蓮、其中は的、注に蓮は房をいふなり、的は蓮中の子なり、以上爾雅、兼名苑、亦多識篇にも詳なり、神農本草經上品の藥なり、本草綱目水藻類にも載す、はちすは和名鈔に爾雅を引ていふごとく、莖葉花實根共に各名を異にすれども、實の名なる蓮を通稱と